

縦横

知性や論理や科学といった、宗教や封建的諸制度による中世的呪縛から人間を解放するために近代が金科玉条としてきた価値体系の全てを、いま世界は放棄しつつあるように見える。ネオコンが主導するブッシュ政権のアメリカや、EUでのヘゲモニーを失ったばかりに米国に盲従するブレア政権の英国などがその例だが、わけてもこの国においてこの傾向は特に顕著であり、指導層の知的衰弱は目を覆うばかりである。その典型例が安倍晋三氏であり、彼の政治信条である「美しい国」にそれが集約されている。

彼は、「戦後レジーム」の変更を唱えている。が、なぜこれを変更すべきかの説明は皆無である。ただただ「戦後レジーム」を廃棄して、「美しい国」をつくるのだという。「戦後レジーム」とは何で、それが何ゆえに 15 年戦争後の「レジーム」にならなければならなかったのかを思索しない。それは将来の歴史家に委ねるのだという。つまり、ここには知性や論理や科学といったものは皆無なのである。

美醜はア・プリアリに冠せられるものではない。対象のプロパティの全てが、あらゆる角度から検討された結果として付与されるべき極度に単純化された意味の乏しい形容詞にすぎない。それを己の貧しく狭量な観念に沿って夜郎自大な評価を与え、勝手に「美しい」と言われても何のこともやらさっぱり通じてこない。これが、一国の最高指導者の知的レベルであるから、不安を通り越して恐怖を覚えるのは筆者だけではない。

その具体例の一つが従軍慰安婦問題に関する彼の発言、「従軍慰安婦に国家が関与したという『狭義の強制性』は無い」である。近代が最高の価値とした人権という普遍性を一顧だにしないで、「狭義」に論点をすりかえるのである。慶良間諸島での住民集団自決に関する軍命令や南京虐殺の「百人斬り」の否定などもこれと全く同じレトリックだ。

その手法を憲法問題に適用したとき、近代を近代たらしめた「立憲主義」は見事なまでに抹殺されてしまう。これは世界が共有する「憲法」観ではない。こういう国を世界の誰が「美しい」と言うのだろうか。

